



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「足田写真」データベース化とその利用の試み : 地域性、時代性の考察へ向けて
Author(s)	廣田, 理紗
Citation	北方人文研究, 2, 63-80
Issue Date	2009-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38239
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_p63-80.pdf



「疋田写真」データベース化とその利用の試み

— 地域性、時代性の考察へ向けて —

廣 田 理 紗

北海道大学大学院 文学研究科 思想文化学専攻 芸術学専修 博士後期課程 1 年

序：

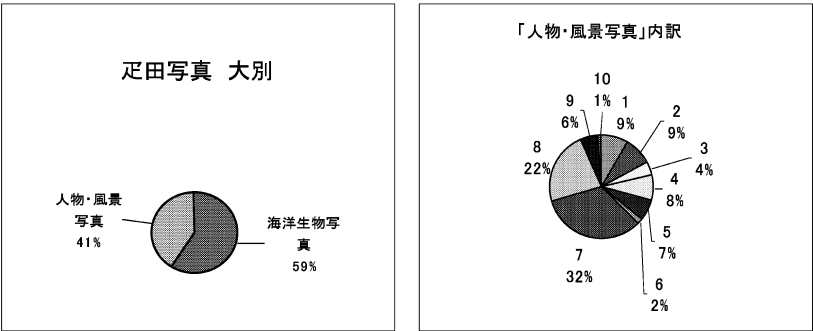
北海道大学（以下、北大とする）は多数の写真資料を所蔵している。その中には、開拓使が北海道開拓事業の進行状況を記録した写真など、日本写真史上重要とされるものも少なくない。写真資料の主たる保管場所である北大図書館では、閲覧請求の多い 5,000 枚を、1992 年に、目録に整理した。しかしその一方、未整理のままとされた写真資料も相当数あり、本論で研究対象とする「疋田写真」もそうした未整理資料の一部である。

本論は、論者の修士論文における研究を引き継ぐものである。なお、2009 年 1 月刊行の「北海道大学大学院文学研究科 研究論集 第 8 号」に、「疋田写真」の形態や保管状況、来歴など、論者が 2006 年から 2007 年にかけて行った調査によりわかった「疋田写真」の詳細、及び「疋田写真」を撮影内容別に分類を試みた拙論が掲載された（廣田 2009）。以下に分類を元にした「疋田写真」の内訳を記すが、本論では資料詳細および分類基準の根拠等の詳細な説明は省く。詳しくはそちらを参照されたい。

【疋田写真内訳】

「疋田写真」 総数 5,926 枚 内訳

- 「海洋生物写真」3,468 枚
- 「人物・風景写真」2,458 枚
- 「北大写真」



—北大の屋外で撮影された風景・光景写真	
—北大構内、学庭で撮影された写真	① 217 枚
—北大農場、臨海実験所などで撮影された写真	② 215 枚
—北大構内、関係施設の建物内にて撮影された光景写真	③ 96 枚
—北大構内、関係施設敷地内の屋外で撮影された人物写真	④ 187 枚
—北大構内、関係施設の建物内にて撮影された人物写真	⑤ 165 枚
—その他	⑥ 42 枚
—「非北大写真」	
—北大以外の場所で撮影された風景・光景写真	⑦ 803 枚
—北大以外の場所で撮影された人物写真	⑧ 567 枚
—複写写真	⑨ 138 枚
—その他	⑩ 28 枚

上記の分類は主として「人物・風景写真」全体を把握することを目的にした非常に排他的な分類である。撮影場所に注目して分類した後、それらを更に人物写真であるか、風景写真であるかに注目し分類した。

本論は「疋田写真」のデータベース化の報告と、「疋田写真」の地域性及び時代性考察へ向け、データベースの利用を通じた画像分析を試みる。本論第1章では、「疋田写真」の概要を説明し、その特徴を示す。続く第2章では、はじめに「疋田写真」データベース化の目的を確認する。「疋田写真」は内容豊かな資料体であるにもかかわらず、今日まで積極的に閲覧されてこなかった。そうした状況を脱し、資料を議論の俎上に載せるには、閲覧環境の改善が必要であると思われた。そこで、「疋田写真」を手に取りやすい形とすることを目標に、データベース化を実施することとした。次に、データベースの仕様及び機能を説明する。論者作成のデータベースは、紙焼き写真と撮影メモの同時閲覧を可能にした点、「写されたもの」という項目を設け、画像を見て重要と思われる要素をキーワードで抜き出した点、以上の2点を特徴とする。データベースの主たる機能は検索による写真の「抽出」、及び「並べ替え」の2つである。この2つの機能によって、複数の写真を関係付けながら閲覧することが容易になった。第3章では、昭和七年八月の擇捉島旅行の間に撮影された写真35枚の同時閲覧・比較分析を試み、データベース利用の一案を示す。その際、抽出された写真を、時系列に沿って、あるいは撮影メモ内容ごとに並べ替えながら、分析を進める。

以上より、複数枚同時閲覧の有効性と「疋田写真」特徴との関連性を確認したうえで、データベース化の意義について考察し、結びとする。

第1章：疋田写真概要

「疋田写真」は、かつて北大水産学部教授を勤めた疋田豊治氏（図1）の手により、撮影された総数約6,900枚のガラス乾板と、約5,900枚の紙焼き写真からなる写真資料群である。撮影者である疋田豊治氏は、明治十五年山形県に生まれ、明治四十二年、現在の北



図1：疋田豊治氏

大水産学部にあたる東北帝国大学付属農科大学水産学科に着任して以降、昭和二十八年まで、約 40 年間北大で教鞭をとっていた人物である。シシャモの発見者として、また鰈の研究者としても知られており、昭和三十六年には北海道文化賞を受賞した。「疋田写真」の撮影期間は明治終わりから昭和二十年頃までの、30 余年間である。したがって「疋田写真」は疋田氏の北大在籍期間中に形成されたことがわかる。現在ガラス乾板は函館の北大総合博物館所属水産科学館に、紙焼き写真は同じく水産科学館と、北大附属図書館との 2 ヶ所に保管されている。ガラス乾板は閲覧可能な状態にあり、保管状態は概ね良好であるが一部にはカビが発生している。疋田写真のガラス乾板のサイズは、多小の誤差があるものの、そのほとんどがキャビネ版サイズと呼ばれるサイズで、11.0 cm×17.0 cm である。中に 11 cm×8.2 cm のサイズのものや、キャビネ版の長辺を短くしたような変形サイズも見られる。紙焼き写真は、それらを全てキャビネ版と呼ばれる 13.0 cm×18.0 cm の印画紙に、密着焼付けという方法を用いて焼付けられている。ここで取り扱う紙焼き写真は全て昭和六十三年に焼付けがなされたものであり、疋田氏の手によるオリジナルプリントではない¹⁾。



図 2：乾板に付された撮影メモ

「疋田写真」の特徴は、先述した①膨大な量と長い撮影期間を持つこと、に加え、②ネガがガラス乾板であり、閲覧可能な状態にあること、③ほとんどの写真に撮影者直筆の撮影メモが残されていること、以上の 3 点が挙げられる。この中で③の撮影メモが残されていることは、撮影場所や撮影年月日といった画像にまつわる個別の情報を示すのみならず、疋田氏の撮影意図を示す記述が含まれる点、写真資料同士の繋がりを示す鍵となる点から、特に重要であると論者は考えている。撮影メモは乾板を包む紙²⁾ (図 2) や、乾板を収納する外箱に記されている。メモには、固定の形式ではなく、情報量にもバラつきが見られる。

第 2 章：データベース化の目的及びデータベースの仕様と機能

「疋田写真」を撮影された内容によって大別してみると、約半数が「海洋生物写真」であり、残る半分は「人物・風景写真」であるといえる。前者は、疋田氏が自らの研究のために取りためた学術的性格の強い写真と見ていいだろう。そのうちのほとんどを魚類標本写真が占めている。本論で主として取り扱うのは後者の「人物・風景写真」であるが、疋田氏の友人や、旅先での風景、北大構内、宴会での記念集合写真など、撮影内容は多岐に渡っており、そのどれもが疋田氏の関心の広さを示す写真である。前者、海洋生物写真に比すれば、後者は疋田氏の個人的な出来事を伝えるような写真であるといえるだろう。しかし、その中には樺太や千島の風景写真のように、今日においては私的な範囲にとどまらず、史料価値の高いと思われる写真が多数含まれている。

- 1) 水産科学館には数枚のオリジナルプリントと見られる紙焼き写真があるが、未調査であり詳細は不明である。
- 2) ガラス乾板は、1～数枚ごとに一枚の紙にくるまれ保管されている。従って、同一の撮影メモを残された写真が複数枚ある場合がある。

このことから、論者は「疋田写真」をさまざまな分野にまたがり研究されるべき資料であると考えているが、「疋田写真」は今日まで、積極的な閲覧がなされてはこなかった。こうした状況を脱し、広く研究対象として扱われる資料となる為には、資料の閲覧環境改善が必要であると思われる。というのも、「疋田写真」にはこれまで紙焼き写真と対応した目録が存在しなかったのである。また、画像に関する情報が詰まった撮影メモも、その存在を知られずにいた。そこで、目録の機能を果たし、かつ快適な検索及び閲覧を実現するには、「疋田写真」をデータベース化することが適当であるように思われた。論者はこのたび「疋田写真」の紙焼き全 5,926 枚中、「人物・風景写真」に該当する 2,458 枚のデータベース化を完了した。

そこで、次に、試作したデータベースの仕様を紹介した後、続く第3章ではデータベースを実際に動かしたときの動きを追いつながら、「足田写真」の一部を具体的に紹介したい。

本データベースは FileMakerPro 8.5 を使用し作成した。先述の通り、紙焼き写真閲覧のための目録となることも期待しているため、写真画像は論者が紙焼き写真を複写したものである。1 枚の写真につき 8 項目、「番号」、「日付」、「画像」、「写っているもの」、「撮影メモ(乾板)」、「撮影メモ(箱)」、「補足資料」、「備考」、を設定し(図 3)、「画像」をのぞく 7 項目全てにおいて、キーワード検索による「抽出」と「並べ替え」を可能とした。文字データは全て論者が入力したものである。

「番号」には、紙焼き写真に一对一対応した目録の機能を備えるべく、紙焼き写真の個別番号を反映させた³⁾。第1章においてその重要性を指摘した撮影メモは、紙焼き写真とともに参照してこそその効果を発揮するものと考え、「撮影メモ(乾板)」、及び「撮影メモ(箱)」それぞれに記載された文字情報を起こし⁴⁾、写真画像と同一ページで閲覧ができるようにした。

「日付」の項目には写真の撮影年月日を記入した。情報源は撮影メモであるが、撮影年月日に関するメモには、「昭和十年夏」などと撮影日までは特定できない記述が多々ある。データベースにはそうした曖昧さを保持したままにしたかったのであるが、使用したソフトの性質上、日付の曖昧な記述は不可能であったため、撮影月までが分かるものは、その月の一日の撮影とし、備考欄に「撮影日不明」と記した。同様に季節まで分かるものは、春→四月、夏→八月、秋→十一月、冬→一月とし、備考欄に「撮影月日不明」と



図 3：データベースの画面例

3) 紙焼き写真の番号は乾板の整理番号に依拠し付されたものであり、この番号順で乾板及び紙焼き写真は整理、保管されている。

4) メモを起こす際、メモに旧字体が使用されている場合にはそのまま旧字体を使用している。

記した。

「写っているもの」という項目には、撮影メモに記された、撮影場所や被写体の情報だけにとどまらず、撮影メモに残されていないながらも、画像を見て重要と思われる要素を、論者の判断により、キーワードで抜き出し記した。例えば撮影内容について「支笏湖ノ風景」としかメモにはない図4の写真は、背景に支笏湖畔にある風不死岳が写しこまれている。画面全体に占める山の割合や、山が中心に据えられた構図を考えると、疋田氏は、支笏湖をこの山ありきで撮影しようとしたように見える。湖や海を撮影する際、その場所を規定するのは沿岸の地形、周辺の山や町である。それらをともに写しこむことなしに、例えば波打つ水面の画像だけで、特定の湖や海を示すことは困難である。このことを考慮すれば、疋田氏にとって風不死岳の示すその稜線は、支笏湖の景を特徴付けるものであり、「支笏湖ノ風景」と記した写真の画面中央に風不死岳を据えたことも不思議ではない。このことは、同じ日に同一の撮影メモを残された写真が、さらに3枚存在することからも明らかである。これら3枚の写真を参照すると、画面における山の高さや画面に占める割合、雲のかかり方などが疋田氏にとってしっかりと調和する撮影ポイントを模索したことが伺え、図4同様に、山と支笏湖を共に撮影しようという撮影者の意図が汲み取れる(図5・6・7)⁵⁾。撮影者や、にとって自明であること、あるいは撮影した時点で撮影者がその名を知らないもの等の情報は、撮影メモに残りにくい。そうした撮影者の意識からもれこぼれた情報を、画像から救い上げ、検索の俎上に載せるのが、「写されたもの」項目に論者が期待した機能である。「疋田写真」には何のメモも残されていない写真が数枚存在するのであるが、この項目で検索をすることにより、そうした写真であっても、他の写真と関連させながらの閲覧が可能となるのである。

次にデータベースの機能面について説明したい。本データベースの主たる機能は2つ、「検索・抽出」と「並べ替え」である。「検索・抽出」は、データベース画面右にある灰色帯の上方の虫眼鏡マークを押すと現れる検索画面(図8)から、各項目にキーワードを直接入力し、実行することができる。図8では「撮影メモ(乾板)」の項目に「忍路」と入力している。この機能により、関連する写真どうしを抜き出し、突き合わせての閲覧が容易になった。ただし、「撮影メモ(乾板)」・「撮影メモ(箱)」の項目については、注意を要する。本データベースの紙焼き写真の目録機能を優先したた



図4:「支笏湖ノ風景 昭和九年九月三十一日」とメモに残された写真



左から、図5、6、7:

図4と同じ日に撮影がなされ、同一の撮影メモが残されている。

5) 図5、6に写しこまれている山が何であるかは、現在のところ同定できていない。

めに、上記二項目については旧漢字を常用漢字に置き換えなかった。このことから、検索をするときも、旧漢字で入力した項目については常用漢字ではなく旧漢字で入力しなくては、適切にデータを抽出することが出来ない。例えば「拵拵」は「擇拵」と入力せねばならない。この点は、今後改善してゆくべき課題である。

検索に際して、適切なキーワードが思いつかない場合は、画面上方「挿入 (I)」から「索引一覧」を選択すると、入力済みの検索キーワードが一覧表示されるので、その中から単語を任意に選出し、検索にかけることも可能である (図9)。

「並べ替え」は時系列順、あるいは各項目に入力済みである文字データの五十音順で、写真を順序だてられる機能である。この機能により、「疋田写真」は常に一定の秩序を保つことが出来る。論者は、その機能が最も有効に働くのは「日付」の項目であると考え (図10)。「風景、人物写真」全体は日付順にして見直すと、疋田氏の写真による日記を見ているようで、そこには疋田氏の生活や交友関係が鮮やかに浮かび上がってくるからである。また、経年のうちに疋田氏の撮影技術が向上してゆくさまも確認できる。



図8：データベース検索画面



図9：「索引一覧」をだした様子



図10：日付順に並べ替え

第3章：データベース利用例―昭和七年八月に撮影された擇捉島旅行写真の分析

次に、第2章で紹介したデータベースの特徴と機能を利用し、写真の「検索・抽出」及び「並べ替え」をしながら、実際に写真の閲覧を試みたい。疋田氏は昭和七年八月に択捉島へ旅行をしている。今回はその間に撮影された写真、全35枚を例にとる。これらの写真は、主として以下の3つの理由から分析に利用するにふさわしいと思われ、使用することとした。まず「人物・風景写真」の中で昭和七年八月以外に択捉島で撮影された写真がないこと、第二に択捉島の旅行期間は2週間ほどであるのに対し、撮影された写真の枚数が多いと思われたこと、第三に択捉島を撮影した写真は、今日では一枚でも史料価値があることが予想されるが、それを分析に用いる事で未公開である多数の画像が公開でき、同時に「疋田写真」の史料価値を分かりやすく示すことができること、以上の三点である。三点目に関して、「疋田写真」には、千島や樺太で撮影をした写真の中に先住民の写り込んでいる写真も存在する。しかし、本論ではデータベースの特徴を示すことを最優先とするために、それらを含む写真を考察対象とはしないこととした。ここで取り上げる昭和七年八月に択捉島で撮影された35枚の写真の中には先住民の撮影された写真は含まれていない。

3-1：時系列順に並べ替え

分析に当たり、まず「擇捉」というキーワードを「撮影メモ(乾板)」の項目に入れ、該当する写真を抽出する。すると31枚の写真が選出される。これを時系列順に直してみると、「擇捉島」とメモの残された写真は、撮影日不明写真を除き、八月四日から八月十六日の間に撮影がなされたことが分かる。次に「日付」の項目に「1932/08」と入力し、抽出を試み、時系列順に並べ替えてみる。すると、先ほど確認した八月四日から八月十六日の間に撮影されたい写真が4枚増える。こうして「撮影メモ(乾板)」と「日付」の二つの項目での検索により、抽出した35枚を、ここでは分析対象とする。

ここで35枚の写真に付された「番号」に注目してみると(図11)、それらは100番台から1400番台までと、かなりばらばらであることがわかる。「疋田写真」はこの番号順に収納されているが、それを考えると、こうした写真同士を目録なしに、画像だけを頼りに探し当てることはほぼ不可能であっただろうとおもわれる。

写真の個別紹介に先立ち、35枚の写真を見渡してみる。まず撮影されたモチーフで言えば、大きな木やそれらが重なり合って出来た林、海や川のような水辺を撮影した写真が多い。見たことのないよ

番号	撮影日	撮影場所	撮影内容
100	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
101	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
102	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
103	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
104	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
105	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
106	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
107	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
108	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
109	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
110	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
111	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
112	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
113	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
114	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
115	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
116	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
117	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
118	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
119	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
120	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
121	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
122	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
123	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
124	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
125	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
126	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
127	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
128	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
129	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
130	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
131	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
132	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
133	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
134	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
135	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
136	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
137	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
138	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
139	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景
140	1932/08/04	択捉島、千島湖	千島湖の風景

図 11：35 枚を抽出した状態。番号がバラバラである

うな枝の張り方をした針葉樹が林を作っており、それらは人の生活圏のすぐ側まで迫っており、両者の距離は大変近い。また、どの写真も被写体の影がはっきり出ておらず、写された人々は八月のお盆前の時期だというのに長袖の上着に身を包み、秋のような装いである。それは八月の択捉島が夏とはいえ外気温はさほど上がらないこと、またそれは直接には強く太陽が照りつける時間が少ないことを示している。日差しの弱さは、どの写真も被写体の影が薄いことから明らかだ。加えて陸から海に向けて撮影したものなどは特に顕著だが、空と水面との境目が曖昧な写真が多く、それは端的に、択捉島が濃霧の発生しやすい土地であることを示している。

抽出した35枚を改めて時系列順になおすと(図12)、疋田氏が擇捉島でたった足取りが浮かび上がってくる。資料2は択捉島全体の地図、及び資料3は疋田氏が訪れた場所に論者が書き込みを行った択捉島の部分地図である。資料4は疋田氏のメモをもとに、疋田氏の択捉島での足取りをまとめ、地図を参照して得た情報を追加したものである。それらを適宜参照しながら論を進めたい。

35枚の写真のうち、日付の残っている写真を紹介する。最初に日付のある写真は「擇捉島ノ遠望(留別沖ヨリ)昭和七年八月四日朝」と撮影メモにある図13である。次に日付の記述がある写真が八月四日から五日にかけて見学している留別の鮭鱒孵化場の写真であることから、疋田氏は八月四日の早い時間に、留別から上陸したと考えられる。図13を見てみると、画面の上下を、陸のような黒いものが空と海とを二分しており、その黒い塊の中央左はすこし奥まった地形になっていることが見て取れる。地図1および地図2を参照すると、留別港は湾になった地形の中にあることが分かり、図13の写真は、メモ内容も考慮すれば、留別沖の海から南東方向を向いたときにみられる択捉島の姿をとらえた写真であることが推測される。疋田氏は留別から上陸後、そのまま留別にある鮭鱒孵化場見学を翌日まで念入りに行っている。その見学は翌日まで続き、一箇所の施設であるにもかかわらず写真を5枚も残していることから、疋田氏のこの施設に対する思い入れの強さがしのばれる(図14、15、16、17、18)。この留別の孵化場は、森の中を切り拓いたかのように、建物のすぐ脇に迫るように樹木が生い茂っており、特に図18などは林の隙間に建物の屋根がぼつぼつと見え、生活圏が森に入り込んでいるのに驚く。続いて八月七日に、疋田氏は留別を離れ南下し、瀬石(セ

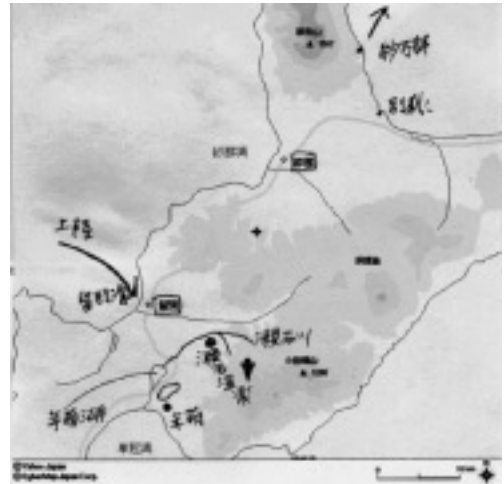
図12：時系列順にした図



図13：「擇捉島ノ遠望(留別沖ヨリ)昭和七年八月四日朝」とメモのある写真



【地図 1】擇捉島地図（全体）
択捉島全景地図（2008 年現在）



【地図 2】擇捉島地図（部分）
択捉島部分地図（2008 年現在）に論者が書き込みをしたもの

セキ）温泉（図 19）、年萌湖（図 20）に行き、写真を撮影している。地図によると瀬石温泉とは、瀬石川という川の上流に位置する温泉であり、瀬石川は、年萌湖に注ぐ川である。図 19 の画面手前に写りこんでいる流れが瀬石川であろうか、川を挟んで対岸には建物、10 人ほどの人物が写されている。しかし、画面中央に横に伸びる大きな柵のせい、図 19 は温泉地という雰囲気からは遠いように思われる。図 20 は画面中央に小船が浮かんでおり、小船には人物がふたりたたずんでいる。水面はとても穏やかであり、2 人の影がはっきりと湖面に映っている。メモから慮るに、この 2 人の人物は疋田、野口の両者であろう。であるとするとシャッターを切ったのは疋田氏ではないことになる。後述するが、このたびには同行者が複数いた。したがってこの写真はおそらく、疋田氏がカメラを据え、画角を決めたうえで、シャッターの役割をしていた帽子を旅に同行した誰かがレンズから外し、撮影されたものであろう。船の上に



上段左から図 14、15、16、
下段左から図 17、18：
「擇捉島留別孵化場 昭和七年八月四、五日」とメモのある五枚の写真

撮影時間中立ち続けられるほど、湖面が穏やかであったこと、つまり昭和七年八月七日の択捉島年萌湖は風が弱く穏やかな気候であったことが、この写真から推測される。

翌九日、十日には「千島斜古丹島⁶⁾」で写真3枚(図版21、22、23)を撮影し、翌十一日には年萌に戻り、「東洋捕鯨会社」を尋ね、そこで2枚の記念写真を撮影している(図24)。図21および22は2枚横並びにして合わせみると、横長の1画面としてパノラマ写真真的に見ることができるように撮影されている。斜古丹の港(地図3参照)が深い入り江を利用して作られたものだということが、この方法によってよくわかる。

翌十二日の日付が付された写真(図25、26)には「択捉島ノ風景(年萌及留別間)」と記されている。十一日に年萌で撮影がなされていることを考慮すれば、この2枚は年萌から次の目的地に向かう途中で撮影された写真であることが想像される⁷⁾。その後十四日には紗那(図27)、十五日には別飛海岸(図28)を経由して疋田氏は紗万部へ達



図19:「択捉島瀬石温泉 昭和七年八月七日」とメモのある写真



図20:「択捉島年萌湖 疋田豊治 野口良雄 昭和七年八月七日」とメモのある写真



【地図3】色丹島の地図



左から図21、22、23:「千島斜古丹島 昭和七年八月九、十日」とメモのある写真3枚

6) 「斜古丹島」はおそらく「色丹島」の誤りである。地図(参考資料5)を参照すると、色丹島北部に斜古丹という土地があることがわかる。ここから、「八月九日、十日」に撮影された3枚の写真は「色丹島」の「斜古丹」という場所で撮影された写真であると推測される。疋田氏はこうした音や場所の類似する地名を勘違いする場合がある。この旅では他にも「年萌川」を「年萌湖川」と記している。

7) 留別には択捉島に上陸して最初に訪れたにもかかわらず、なぜ戻するのかといえば、資料3を参照すると留別年萌間は主要道路が一本しかなく、年萌から出発して北上するためには、留別を避けて通ることができないためなのである。



図 24 : 「東洋捕鯨會社（擇捉島年
萌ニ於テ）大西廉作氏夫妻
及社員 昭和七年八月十一日」と
メモのある二枚の写真の内の 1 枚



左から図 25、26 : 「擇捉島ノ風景（年萌及留別間）
昭和七年八月十二日」とメモのある写真 2 枚

し、ここで風景を撮影するとともに、鰯の漁獲の光景（図 29）を見学し、旅を終える。こうして旅程順に写真を並べ替えてみると、このたびは択捉島中部を中心として、島北部のオホーツク海側へ抜けてゆくルートが地図の上に引ける（地図 2）。

しかしこれらだけでは、写真同士の間につながりがあり感じられず、選ばれた旅程も大きな道に沿っただけのようにも思えてくる。そもそも八月であるのに長袖の衣服を着込まねばならぬほど寒く、道路も利便性がいいといえるほど整えられていない、つまり不便の多そうな昭和七年の択捉島に、積極的に旅行に行くのは何を目的としていたのか。ここで注目したいのが、撮影月までは分かっているものの、撮影日の不明な写真 13 枚である（図 30、31、32 はそのうちの一部）。

疋田氏は水産学の中でも養殖科の教師であった。それを思い出しながら、次には乾板に残されたメモの項目別に並べ替えて写真を見直すと、疋田氏の訪れた場所にひとつの共通点をはっきりと浮かび上がる。

3-2：撮影メモ順に並べ替え

乾板に記されたメモの内容ごとに写真を並べなおすと、撮影日不明の写真と撮影日の明確な写真とのメモ内容に共通する単語があることが分かる。それは例えば、「年萌」、「瀬石川」、などである。これらについて撮影メモの内容をまとめると、次のようになる。



図 27 : 「擇捉島紗那郡栖原支店
社員 昭和七年八月十四日」とメモ
のある写真



図 28 : 「擇捉島別飛海岸ニ於テ
卒業生（一色、水戸部、堀越、金森、
三浦等ノ諸氏）ト共ニ撮影ス 昭
和七年八月十五日」とメモのある
写真二枚の内の一枚



図 29 : 「擇捉島紗万部ニ於テ 鰯
ノ漁獲光景 昭和七年八月十五、
六日」とメモのある写真



図30：「鯨 擇捉島年萌捕鯨場ニ於テ(東洋捕鯨會社)昭和七年八月」とメモのある写真



図31：「擇捉島瀬石川(時不知ノ産卵場)昭和七年八月」とメモのある写真



図32：「海苔乾燥ノ光景 擇捉島年萌 昭和七年八月」とメモのある写真

「年 萌」：年萌湖、年萌湾がある。年萌には「東洋捕鯨会社」なるものがあり、その会社は捕鯨船と捕鯨場を年萌港に持っている。年萌湖には遡上する魚類(時不知、樺太鱒、イチャニマス)を捕獲する網が張られる場所がある。年萌湖川という川がある。

「瀬石川」：瀬石温泉という温泉があり、時不知の産卵場所がある。

このほかにもメモには、「時不知」、「樺太マス」、「漁獲」、「産卵場」といった記述があり、先に紹介した写真の中には孵化場を撮影した写真が五枚も含まれていた。これらをあわせ考えると、全てはサケ・マス科の捕獲や養殖事業にかかわりのある記述であると、すぐに思いつくだろう。

ここで、疋田氏のこの旅の目的として、ひとつの仮説が立てられる。八月の上旬から中旬にかけてなされたこの旅行は、大学教授であった疋田氏にとっては動き易い、授業のない時期になされたものであった。その上、乾板を収納する箱には「旅行」とメモ書きされて⁸⁾おり、行く先々で記念撮影をしていることだけ見れば、一見すると旅の目的がどこにあるのかはなかなかはっきりとは見えてこない。しかし複数の画像をメモと共に、時系列順・撮影メモ順に並べ替え、突き合わせてみると、この旅の目的は観光などではもちろんなく、養殖科の教師としての研修であったのではないかと思われてくる。上陸して最初に訪れた留別にはりっぱな建物が整備された鮭鱒孵化場があり、そこから時不知の産卵場である瀬石川、捕鯨会社があり、時不知や樺太鱒の遡上する湖がある年萌を経て最後に訪れた紗万部では大量に水揚げされた鱒の漁獲光景を見学していた。

そこで、択捉島の漁業について調べてみるとすぐに以下のことが判明した。

榎本進『千島海域漁業の史的展開』によれば、択捉島の漁業は根室との関係の中でゆれ、発展していったところがある。択捉島は江戸時代からの主にマスの漁場として有名で、樺太マスがよく取れた場所である。また、すぐ隣の根室は鮭漁で有名な場所であり、和人の手によってであると安永年間から、もっと早くを考えると「原住民であったアイヌによって行われており、歴史的には最も古い伝統を持つ漁業」⁹⁾であるとのことだ。明治末に乱獲が原因で、根室沖での鮭鱒漁獲高は一時大変に落ち込んだ。そこで、新たな漁場として、注目されたのが、南千島海域、中でも択捉島近海であった。しかし、択捉島でも乱獲のために漁獲高が下がっていき、大正から昭和にかけての時期に、根室や釧路、千島に次々と孵化場が作られた。昭和七年当時、択捉島には大小あわせて10の孵化場、

8) 乾板のしまわれている箱はいくつかに分かれるものの、それらにはどれも「択捉島旅行 昭和七年八月」とだけ書かれている。

9) 榎森 進『千島海域漁業の史的展開』発刊日不明(昭和43年10月22日北大図書館受け入れ) p.78「鮭鱒漁業の発達」より

事業所があり、昭和二年に国営化された留別孵化場を除いて、残る八個の孵化場は全て道営にされた。ここに、北海道水産業において択捉島の鮭鱒ふ化事業が、重要視されていたことが判明する。疋田氏が択捉島に上陸して初日から二日続けて見学した留別の鮭鱒孵化場



図 20 : 「擇捉島年萌湖 疋田豊治 野口良雄 昭和七年八月七日」とメモのある写真



図 33 : 「擇捉島年萌湖 昭和七年八月 湖上魚類(時不知 樺太鱒 イチヤニマス)捕獲網」とメモのある写真

は、北海道庁水産課が昭和二年に出した『北海道水産要覧』によれば、千歳、釧路の西別について三番目に国営化された重要施設であり、前述の二つの孵化場と比すると、とくに樺太マスに重点が置かれ、研究がなされたということである。

以上より、昭和七年当時、択捉島では水産業、とりわけ鮭鱒のふ化養殖事業が盛んであったことに加え、北海道の水産を考える上での要所であったことをかんがみると、疋田氏のこの旅の主たる目的はやはり研究のための研修旅行であったといえよう。

ここで、撮影日の明確な図 20 と背景のよく似た図 33 を比較してみたい。図 32 は撮影日不明であるが、図 20 との間には共通点が多い。さらに撮影された地形、特に湖奥の山並みに注目してみると、この二枚が撮影された場所は大変近いところであるように思われる。具体的には図 20 画面奥から左手奥へ進み、岸に近寄ったあたりで図 33 は撮影がなされているように見える。画面を拡大してみると、どちらの画面右上方にも水面に浮きの様なものが確認でき、それは同一のもののようにみえる。図 33 には漁獲のための網が、画面右下から奥へ進み、仕掛けのような大きな塊が浮いているのをはさみ、そこから今度は画面左へ岸の縁を伝うように続き、仕掛けられている。この網の仕掛け方を見ると画面外左には川があると見ていいだろう。そして、漁獲される魚は川から湖の方へ、画面左から右へ、泳ぎ進んでくると考えられていると見ていいだろう。「撮影メモ(乾板)」には図 20 同様図 33 にも「年萌湖」の記述がある。ところで先に取り上げた 13 枚の撮影日不明写真の中に、「年萌湖川の景」とメモの残る写真が 2 枚ある(図 34、35)。「年萌湖川」という名の河川は存在しないことから、それは年萌湖を源にし、海へ注ぐ「年萌川」のことをさしていると考えられる。このことから図 32 の画面左外にあるように推測される川は年萌川ではないだろうか。また、そうであるとすれば、年萌川が 2 枚撮影されているのだから、その近くで湖の写真も撮影したとするならば、同じ日に 2 枚撮影された、と考えることに不自然はないように思われる。実際に、年萌湖の地図(地図 4)を参照し遡上魚類の捕獲網をかけていた場所を確認してみると、年萌川と年萌湖の混ざり合う所であることが分かる。



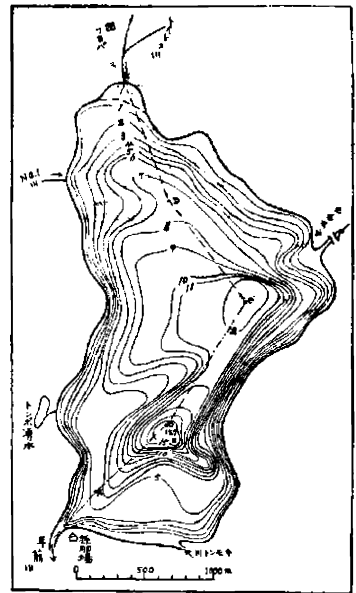
図 34、35 : 「擇捉島年萌湖川ノ景 昭和七年八月」とメモのある写真 2 枚

八木沢(1970)によれば、年萌川は樺太鱒などが遡上してくる川であるという。このことは図33の撮影メモと照らし合わせて考えてみても、図33が年萌川のすぐそばで撮影された写真であるということを裏づけると考えていいだろう。先述の通り図20は八月七日に撮影されたことが記録に残っている。疋田氏が撮影に使っていたと考えられているカメラは携帯しようとする30kgもの重さがあるもので、組み立て式の大きな三脚の付いた、今から考えるととても手間のかかるものであった。以上を考えあわせると、図33及び図34、図35は、それぞれ撮影された場所が大変近く、図20を含む四枚は、昭和七年八月七日に撮影された、と考えることに無理はないであろう。

結び

「疋田写真」は撮影メモが残されていることから、その一枚一枚が、史料としての足場のしっかりした資料であるといえる。また、長い撮影期間、豊富な量、という特徴は「疋田写真」の強みである。「疋田写真」は、この特徴ゆえに複数の写真を比較、あるいは関連付けながらの閲覧が可能なのであり、そうした閲覧を通じ、これまで分からなかった多くのことをわれわれに示してくれる資料なのである。この点こそが「疋田写真」最大の長所といっている。しかし、従来の目録もない、撮影メモも知られていない状態にあっては、そうした特徴は、返って「疋田写真」の弱点と化してしまっていた。こうしたことも、「疋田写真」がデータベース化されたことにより、閲覧環境が整っただけでなく、資料本来のよき性質が浮き彫りとなった点に、負うところが大きいだろう。そこに、本データベースのその意義は見いだせる。ただし、データベースには課題も残った。「写されたもの」の項目は、撮影者の意識からもれた情報を拾い上げる一方で、現状「写されたもの」の項目を埋めているのは論者であり、その限りにおいて恣意性を排除できない。データベースの汎用性という点において、この項目の埋められ方が妥当であるか否かは今後検討の余地がある。

「疋田写真」の撮影対象が多岐に渡っていることは序においても報告したとおりであるが、写真を個別に見てゆくと、疋田氏は友人の訪問に接して、茂りのいいマイタケを入手して、などと生活のあらゆるシーンで自らその機会を見いだしては写真撮影をしていたように思われる。ここから、疋田氏にとって写真撮影は、当時大変手間のかかる作業であったにもかかわらず、大変日常的な行為であったろうことが容易に想像できる。そうして撮り溜められた写真は、疋田氏の関心の範囲の広さを示す一方で、どうにも雑多な印象を見るものに与える、個別的な情報の塊となっている。択捉島で撮影された写真も、ただ突き合わせて見るだけでは、そうした日常的な色合いの強い、互いにかかわりを強く持たない写真であるように見えるのである。しかしそれらをいくつかの基準できっちりと並べたてることにより、旅の目的を仮説し、それに関連する文献に当たりつつ再度写真を見直してゆく作業により、撮影されたものの必然性が見えてきた。また、撮影日の記録がない写真の撮影日の絞り込むこともできた。また、昭和七年八月当時の擇捉島及び色丹島の気候や、北海道養殖水産業界の状況、そこに占めた択捉島の重要性、などを明らかにすることができた。しかしなが



【地図4】年萌湖の地図

ら、これは「疋田写真」全体が示しうる「地域性」、「時代性」といった全体的問題を考察してゆく上で必要な、ほんの一部分を明らかにしたに過ぎない。次に議論を推し進めるためには、今回示したような複数枚写真の同時閲覧をいくつも重ね、明らかとなる部分部分を積み合わせ、層を成してゆくことが必要不可欠であろうと思われる。

今後は本論で取り扱わなかった「海洋生物写真」もデータベース化し、疋田氏の魚類研究と写真との関係や、いくつかの「海洋生物写真」において確認される美的工夫についてとりあげ、「人物・風景写真」のそれと比較することにより、疋田氏の作家性についても考察を進めてゆきたいと考えている。

【資料1】「疋田写真」及び地図から分かる、昭和七年八月擇捉島旅行における疋田氏の足取り

八月四日、留別沖から択捉を望む→留別港から上陸か。

同日留別入りし、鮭鱒孵化場を見学。

八月五日、引き続き留別で鮭鱒孵化場見学。

八月七日、瀬石温泉、年萌湖にて撮影。

*瀬石温泉は瀬石川の上流にある温泉であり、瀬石川は、年萌湖に注いでいる(地図参照)。瀬石温泉と年萌湖は近い。

*年萌湖のすぐ南にはキモン沼という小さな沼があり(地図参照)、疋田氏はそこでも撮影をしている。撮影日は不明。

八月九・十日、色丹島にて撮影(三枚)。

八月十一日、年萌にある「東洋捕鯨会社」を訪ね、記念撮影(二枚)。

*年萌の捕鯨場に行き鯨の水揚げ風景を写した写真四枚、東洋捕鯨会社初秋とされる捕鯨船が航行する様子を沖から撮影した写真一枚、がある。

八月十二日、年萌―留別間の風景を撮影(二枚)。

→年萌―留別間を結ぶ主要な道は一本しかない(地図参照)ことから、留別に戻っているのではなく、留別の北へ向かっていると推測される。

八月十四日、紗那郡にて撮影

八月十五日、別飛(ベツトビ)海岸で同行の教え子たちと記念撮影。

八月十五・十六日、紗万部で風景撮影、紗那万部で樺太鱒の漁獲光景見学

参考文献一覧

榎本進

1968 『千島海域漁業の史的展開』 出版元不明

木村鎭郎

1980 「エトロフ島懐古録」『魚と卵』第149号：pp.62-67

渋谷四郎

1983 『北海道写真史：幕末・明治』 平凡社

渋谷四郎

1991 「フォトグラフ渋谷四郎コレクション⑧ 千島列島全盛期の風景 ― 疋田コレクションより ―」
『月刊イズム ISM』情報企画：pp.52-55

渋谷四郎

1991 「フォトグラフ渋谷四郎コレクション⑨ サハリン(樺太)の風景 ― 疋田コレクションより ―」
『月刊イズム ISM』情報企画：pp.48-51

渋谷四郎

- 1991 「フォトグラフ渋谷四郎コレクション⑩ 満州とよき時代の北海道」『月刊イズム ISM』情報企画：pp.48-51

渋谷四郎

- 1991 「フォトグラフ渋谷四郎コレクション⑪ 北大クラーク先生の除幕式」『月刊イズム ISM』情報企画：pp.50-54

下山卯之松

- 1970 「特集 命拾いをした話」、『魚と卵』第133号（国後と択捉特集）：pp.23-32

ニッコール・クラブ

- 1980 『北海道開拓写真史 記録の原点』ニッコール・クラブ

疋田豊治

- 1934 「北日本産鰈類」『水産研究彙報』Vol.4：pp.187-296、北海道帝國大學附屬水産専門部

疋田豊治

- 1956 「北海道に於ける鯉の解剖と発生について」『孵化場試験報告』第11号：pp.65-95

疋田豊治

- 1958 「柳葉魚（シシャモ）*Spirinchus lanceolatus* (Hikata) の発生について」『北海道立水産孵化場研報』Vol.13：pp.39-49

疋田豊治

- 1952 「黒頭鰈の発生に就いて」『水産孵化場試験報告』第7号：pp.133-144

疋田豊治

- 1952 「能取湖産魚類及び水産動物に就いて」『水産孵化場試験報告』第7号：pp.105-125

疋田豊治

- 1954 「擇捉島湖沼調査報告」『孵化場試験報告』第9巻1号：pp.1-85

疋田豊治、深澤武藏 共著

- 1952 『小樽近海魚類圖説』新星社

廣田理紗

- 2007 「疋田豊治氏撮影の写真資料群の紹介」『北大文学研究科公開シンポジウム 北方的——北方研究の構築と展開』：pp.94-99

廣田理紗

- 2009 「北海道大学総合博物館所蔵『疋田写真』——そのデータベース化と画像分析の試み」『北海道大学大学院文学研究科 研究論集 第8号〈第一分冊〉』：pp.59-84

北海道 編

- 1989 『新北海道史年表』北海道出版企画センター

北海道大学水産学部北水同窓会 編

- 1957 『親潮 北海道大学水産学部創基五十周年記念誌』、北海道大学水産学部北水同窓会

北海道大学図書館附属図書館

- 1992 『明治大正期の北海道——写真と目録〈目録編〉』北海道大学図書刊行会

北海道大学図書館附属図書館

- 1992 『明治大正期の北海道——写真と目録〈写真編〉』北海道大学図書刊行会

北海道大学百二十五年史編集室 編

- 2003 『北大百二十五年史』北海道大学

北海道廳水産課

- 1927 『北海道水産要覧 昭和二・四年』北海道廳水産課

北大水産学部七十五年史出版専門委員会 編

1982 『北大水産学部七十五年史』 北海道大学水産学部

北大水産学部百周年記念誌出版専門委員会 編

2007 『北大水産学部百周年記念誌』 北海道大学水産学部

八木沢喜家

1970 「特集 択捉島のさけ・ますふ化事業」、『魚と卵』第 133 号（国後と択捉特集）：pp.35-79

The Database of the Photographs taken by Toyoji Hikita, and an experiment involving their utilization:

in consideration with the time and location that the photographs were taken

Risa HIROTA

Graduate School of letters, Hokkaido University

Hokkaido University has a great many historical photographs; a good example of which are the pictures taken by Kaitakushi. Recently, some of Kaitakushi's pictures were used to chronicle phases of the pioneer days in Hokkaido. About 5,000 of the most often requested photographs taken during the Meiji or Taisho era were selected and categorized in 1992. However, there are so many pictures that remain to be catalogued, such as photographs taken by Toyoji HIKITA; fondly known as *Hikita pictures*.

In the first chapter, I show an outline of the *Hikita Pictures*. The *Hikita Pictures* were taken from 1900-1940. The chapter features three characteristic points. The first is the sheer volume. About 6,000 negatives out of 6,900 negatives made of glass were selected for paper prints. The second point is that even though these negatives made of glass are very valuable, they have been provided for public viewing. The third point has to do with the fact that Hikita left many notes about the pictures that specified when and where the picture was taken and provided details about the things in the photographs. I think the third point is the most important because the notes also help us understand how each picture is connected to the others. In the second chapter, I confirm the objects in the *Hikita picture* database. The contents of the *Hikita Pictures*, half of which is specimens of sea creatures. The remainder varies between photographs of people and landscapes. This paper focuses on the remainder, because it includes the pictures of Chishima, or Karahuto, and other prized photographs. Although the *Hikita pictures* are quite intriguing, they have rarely been used. This is due to the fact that they have not been properly catalogued. However, there is a database in place of the catalogue and it serves as a reliable reference. I finished making the database, so in the third chapter, I describe how it was constructed and is used. Its main function is to help search for pictures that are used as references, and change the order according to one's preference.

Referencing using the database, *Hikita Pictures* is the most effective, I think. To demonstrate how the database works, I select the 35 pictures that were taken in Etorohu in August 1938, and using the reference notes, or by changing the order, I can find out the purpose of the trip, or know the location or the time that the photograph was taken.